ＴＡＴにおける関係相の検討

関山　徹*

（2020 年 10 月 21 日　受理）

Validation of the Patterns of Relations among Characters in the Thematic Apperception Test

SEKIYAMA Toru

要約

TAT（Thematic Apperception Test）の新しい分析手法として鈴木(2012)が提唱した「関係相」の妥当性について検証を試みた。具体的には、大学生女性 36 名を被検査者として、そこから得られた第Ⅰカテゴリーから第Ⅲカテゴリーまでの各関係相と MMPI の各得点との間の相関を検討した。その結果、第Ⅰカテゴリーでは Expl（探究的な関係様態）および Pas-F（受身的な関係様態）、Ⅰ.Conc（隠蔽的・逃避的な関係様態）において、第Ⅲカテゴリーでは Prov/Ser（受容的な関係様態）および Harm（危害を加える関係様態）において、各関係相の定義と矛盾しない方向の中程度ないしは弱い相関が認められた。以上から、当該の関係相には一応の妥当性が備わっていると考察された。

キーワード：関係様態、欲求-圧力分析、投映法、分析手法、MMPI

Ⅰ．問題と目的

TAT（Thematic Apperception Test）は、被検査者がどのように自他や物事と関わっているかを把握する際に、きわめて有用な検査である。TAT の開発を主導した Murray, H. A.(1938)は、被検査者の関係様態をとらえるために欲求-圧力分析を用いたが、その方法が煩雑なことや主人公の設定の仕方によって分析結果が異なってしまう問題などがあり定着しなかった。このような問題を踏まえ、鈴木

* 鹿児島大学 法文教育学域 教育学系　准教授

(2012)は、「関係相」という分析手法を提唱し、4つの臨床事例を用いてその有意義性を示している。しかしながら、量的な検討はまだ行われていない。そこで、本研究では、関係相の妥当性について、一定規模の被検査者を用いて検証を試みることにした。

Ⅱ．方法

1．被検査者

被検査者は鹿児島県内の4年制大学に在籍する女性36名であり、平均年齢は20.5歳（*SD* 1.1）であった。なお、本研究の実施および発表は、すべての被検査者の同意を得て行われた。

2．手続き

被検査者の全員に対して、①TATハーバード版、②MMPI新日本版（MMPI新日本版研究会, 1993）を実施した。TATは鈴木(1997)の教示に準拠して集団で実施し、図版についてはカード1・2・3BM・4・8BM・13MF・15・20の8枚を用いた。なお、TAT反応は被検査者自身がボールペンで筆記する方式をとった。検査の実施は2011年から2012年にかけて行われた。

得られたTAT反応に対して、鈴木(2012)の関係相の定義に従って分類・記号化を行った（詳細はTable 1を参照）。但し、今回はカテゴリーⅠ～Ⅲのみを分析対象とした。そして、被検査者ごとに各関係相の出現数を集計した。

Table 1　関係相のカテゴリー(鈴木, 2012)

Ⅰ	**Expl**：見たい（知りたい）ものを意図的に見（知）る ［例：暴く・見破る・探る・調査する・観察する］	Ⅲ	**Spo/Sav**：支援・救助 ［例：支える・救う・治す・気遣う］	Ⅴ	**Uni**：結合・融合 ［例：再会する・和解する・結婚する］
	vs. **Pas-F**：見たくないものをたまたま見てしまう ［例：目撃する・知って驚く・恐怖する］		**Prov/Ser**：供給・奉仕 ［例：与える・世話する・つくす］		
	Expo：自分を見（知）られる・見（知）られたい ［例：認められる・主張する・告白する・ばれる］		vs. **Harm**：侵害 ［例：襲う・闘う・壊す・自殺する］		vs. **Sep/Los**：分離・喪失 ［例：離別する・見捨てる・拒絶する］
	vs. **Conc**：自分を見られない・見られたくない ［例：隠す・偽装する・引きこもる・逃げる］		vs. **Dep**：（物の）剥奪 ［例：奪う・盗む・取る・困窮する］		
Ⅱ	**Con/Coer**：統制・強制 ［例：有無を言わせずやらせる・禁止する・叱る］	Ⅳ	**Like**：好感・愛着 ［例：好く・慕う・かわいがる］	Ⅵ	**Pos-F**：向上・発展 ［例：成長する・幸せになる・立ち直る］
	vs. **Ask/Req**：依頼・要求 ［例：頼む・求める・誘う・祈る］		vs. **Hos/Disg**：敵対・嫌悪 ［例：冷淡・嫌う・憎む・妬む］		
	Dec：教唆 ［例：騙す・よくないことを吹き込む・けしかける］		**Love**：性愛・執着 ［例：恋慕する・求愛する・愛し合う］		vs. **Neg-F**：衰退・没落 ［例：破滅する・不幸になる・自殺する］
	vs. **Gui**：教導 ［例：正しく導く・教える・諭す］		vs. **LoL**：愛の欠如 ［例：愛が冷めた・愛を装い利用する］		

Table 2　TATカード8枚において出現した関係相の平均値（*SD*）

関係相	Ⅰ				Ⅱ				Ⅲ			
	Expl	Pas-F	Expo	Conc	Con/Coer	Ask/Req	Dec	Gui	Spo/Sav	Prov/Ser	Harm	Dep
平均値	1.56	1.14	1.64	1.50	1.03	.64	.06	.11	1.69	.75	1.33	.28
(*SD*)	(.97)	(.99)	(1.33)	(1.32)	(1.00)	(.72)	(.33)	(.32)	(1.21)	(.87)	(1.01)	(.51)

Table 3　MMPIの平均値(*SD*)、およびMMPIと関係相の相関(*r*)

MMPI	平均値	(*SD*)	関係相								
			Ⅰ				Ⅱ		Ⅲ		
			Expl	Pas-F	Expo	Conc	Con/Coer	Ask/Req	Spo/Sav	Prov/Ser	Harm
L	42.4	(5.9)	.18	-.04	-.05	.27	.24	-.31	.04	.02	-.15
F	51.5	(11.0)	-.19	-.02	.11	-.14	.08	.11	-.12	-.19	.33
K	43.7	(10.8)	.12	-.31	-.18	.17	.03	-.22	-.01	.22	-.47 **
1 (Hs)	49.9	(6.5)	-.07	-.12	.24	.19	.07	.01	.01	-.12	.10
2 (D)	51.5	(10.0)	.09	-.18	.14	.11	.31	.06	.18	-.28	.19
3 (Hy)	50.4	(6.6)	-.09	-.29	.12	-.32	.06	.12	.06	.01	-.10
4 (Pd)	50.1	(7.4)	.18	-.16	.07	-.15	.15	-.22	.11	.09	.30
5 (Mf)	54.0	(9.5)	.02	.22	.00	.15	.05	.29	-.16	-.07	.00
6 (Pa)	56.7	(9.3)	-.49 **	-.01	.16	-.26	.06	.18	.24	-.47 **	.20
7 (Pt)	54.2	(10.3)	-.05	-.33	.14	.07	.23	.07	.13	-.14	.24
8 (Sc)	51.3	(10.3)	-.08	-.34 *	.01	-.10	.30	-.05	-.14	-.20	.35 *
9 (Ma)	49.6	(9.6)	-.16	-.06	.02	-.46 **	-.07	.26	-.03	-.14	.22
0 (Si)	53.3	(10.2)	-.01	-.11	-.04	.15	.15	.21	-.04	-.05	.31

［ *:p < .05、**: p < .01 ］

Ⅲ．結果と考察

各関係相における出現数の平均値（*SD*）を Table 2 に示した。そして、各関係相と MMPI の各尺度との間の相関係数を算出して、Table 3 に示した。しかしながら、出現頻度が極端に低かったⅡ.Dec およびⅡ.Gui、Ⅲ.Dep については、分析の対象から除外することにした。その結果、MMPI との間では、Ⅰ.Expl は第６尺度（Pa）とは中程度の負の相関（r =-.49）を、Ⅰ.Pas-F は第８尺度（Sc）とは弱い負の相関（r =-.34）を、Ⅰ.Conc は第９尺度（Ma）とは中程度の負の相関(r =-.46)を示した。また、Ⅲ.Prov/Ser は第６尺度とは中程度の負の相関（r = -.47)を、Ⅲ.Harm は K 尺度とは中程度の負の相関（r =-.47）および第８尺度とは弱い正の相関（r =.35)を示した。

Ⅰ.Expl は、意識的に見たり知ったりする探究的な関わりの様態である。他方、Freidman, A. F. et al. (1989)によれば、MMPI の第６尺度の高さは「パラノイド的」で「猜疑的」な傾向を表すものであり、Ⅰ.Expl とは正反対の指向をもつ態様である。したがって、これらの間で認められた負の相関は、Ⅰ.Expl の特徴を的確に反映していると考えられよう。

Ⅰ.Pas-F は、見たくない知りたくないという欲求にもとづく受身的な関係様態である。その一方で MMPI の第８尺度の高さは「疎外感」や「社会的に逸脱」する傾向を、その低さは「従順」で「依存的」な傾向を表すため、Ⅰ.Pas-F との負の相関は納得のできる結果であると言えよう。

Ⅰ.Conc は、意図的に見られないようにする隠蔽的・逃避的な関係様態である。他方、MMPI の第９尺度の高さは「開放的」で「エネルギッシュ」な傾向を表し、Ⅰ.Conc とは逆の方向性をもつ。したがって、第９尺度との間で認められた負の相関は、Ⅰ.Conc がもつ特徴とよく合致していると考えられよう。

Ⅲ.Prov/Ser は、親身に世話をしたり必要な物を供給したりする受容的な関係様態である。他方、MMPI の第６尺度の意味するところは先述したとおりであるが、その高さは他者に対して親和的ではない傾向をもつとも言える。したがって、第６尺度との間の負の相関は、Ⅲ.Prov/Ser の特徴を的

確に反映していると考えられよう。

Ⅲ.Harm は、自己中心的に危害を加える関わりの様態である。一方、MMPI の K 尺度の高さは「対処能力」や「自我強度」を表し、Ⅲ.Harm とは正反対の傾向をもつ。K 尺度との負の相関は、自制的に対応する力の拙さという点で、Ⅲ.Harm の特徴と合致していると言えよう。また、第８尺度の高さは先述したように社会的逸脱に関係するため、Ⅲ.Harm との間で認められた正の相関も矛盾のないものと考えられよう。

以上により、関係相の各側面は、被検査者の関わりの様態を多様にとらえており、一定の妥当性を備えていると考えられよう。しかしながら、本研究の検討においては、第Ⅱカテゴリーを中心に特段の相関が認められなかった関係相も存在し、部分的な検証に終わった面は否めない。第Ⅳカテゴリー以降の検証にいたっては未着手である。また、TAT はカードによってかなり異なる刺激を有しており、対象カードを拡げていくことも課題である。今後は、被検査者の人数を増やし男性も対象に含めるなど、より包括的に検証を進めていく必要がある。

引用文献

Friedman, A. F., Webb, J. T. & Lewak, R.　1989　Psychological assessment with the MMPI. Lawlense Earlbaum Assosiates, Inc.: New Jersey［田中富士夫（監訳）　1999　MMPI による心理査定. 三京房］

MMPI 新日本版研究会　1993　MMPI マニュアル. 三京房.

Murray, H. A.　1938　Explorations in personality. Oxford University Press: New York.［外林大作（訳編）　1961　パーソナリティⅠ・Ⅱ. 誠信書房］

鈴木睦夫　1997　TAT の世界. 誠信書房.

鈴木睦夫　2012　絵解き法（TAT）のすすめ. 中京大学心理学研究科・心理学部紀要, 12(1), pp.11-159.

附記

※ 本研究は日本学術振興会科学研究費補助事業〔基盤研究（C），課題番号 18K03101〕の助成を受けて行われた。

※ 本研究は、日本犯罪心理学会第 56 回大会（2018 年 12 月 8 日；奈良県文化会館）において発表した内容を加除修正したものである。

※ 本研究に協力していただいた被検査者およびその関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。